

学生と農家にとってWin-Winの関係性を作る

名寄市立大学援農ボランティアの会

名寄市立大学援農ボランティアの会は、名寄市立大学・JA道北なよろ・名寄市が連携して「援農有償ボランティア（以下、「本事業」）」の機会を作り出す活動（名寄市立大学援農有償ボランティア事業）を行っています。学生は有償で農業を手伝い、その対価としてお金だけでなく食農教育の機会を得ることで、参加する学生・受け入れ農家双方にとって良い関係性が築かれています。その経緯と現状について紹介します。

【援農有償ボランティア事業開始の背景と経緯】

名寄市の農業は日本一の生産量を誇るもち米が代表的ですが、アスパラやスイートコーンといった青果物や花卉、酪農など多様な農業が営まれています。近年、人口減少や少子高齢化に伴い、全国的な人手不足が叫ばれていますが、名寄市もその影響を大きく受けています。特にアスパラ、スイートコーン、かぼちゃなど、収穫時の機械化が難しい青果物は、労働力（手作業）も多く必要となるため比較的機械作業が可能な小麦や大豆といった耕種作物に転換する農家も多くなっています。地域産業を支える農家の労働力不足は、農協や市役所の関係者も頭を悩ませていました。

名寄市内には、保健医療福祉分野（栄養・看護・社会福祉・社会保育）に関わる専門職を養成する名寄市立大学があり、800名弱の学生が学んでいます。学生たちは地元のアルバイトやボランティア、マチの各種イベントに参加するなど多様な形で地域の支えにもなっています。

本事業の活動以前、農家さん個人が学生アルバイトを募集することもありましたが、応募はほぼなかったと言います。農学系の大学とは異なり保健医療福祉系大学では、農業との関わりを持つ学生はほとんどなく、このような経緯から、農業関係者からも学生からもお互いに「遠い存在」と思われていました。2017年、学生から「せっかく名寄に来たのだから、名寄でしかできない経験をしてみたい」との相談を受けたことをきっかけに、知り合いの農家さんに「大学までの送迎付き農業アルバイト」受け入れをお願いしました。このアルバイト希望者は結果的に15名程度の学生が参加し大変好評でした。

保健医療福祉分野を学ぶ学生は、農業や農作業には興味関心を持っていないという思い込みもありましたが、現実とは違ったのです。そこで、2017年11月に農協と市役所の担当者に声をかけ、学生の農業参加をサポートする仕組みを作れないか相談し、本事業の組織化がスタートしています。

【仕組みと工夫】

農業・農作業を知らない（専門外の）学生と農家を結びつける工夫について紹介します。一番の特徴は「農業アルバイト」ではなく「有償ボランティア」としたこと。ボランティア＝無償の考え方が一般的ですが、本事業では「有償」のボランティアとしています。

無償の場合、自身の自発的意思が優先され、作業に関する指揮命令権（作業内容の指示や参加日・時間の設定など）がないとされます。このため都市部で行われている援農ボランティアでは、主に退職者が自分の好きな時に参加しています。しかし大学生の場合、移動手段（車）を保有していないためどうしても「送迎」を必要とします。繁忙期の農家が「自由意志」＝「いつ帰るか分からない学生」を送迎することは困難です。

このため、少しだけ自由意志（作業日や作業時間）を我慢してもらい代わりに、無償ではなく有償のボランティアとしています。これがもしアルバイトであった場合、お金を払っている（受け取っている）分は働いてもらわなければ困る（見合った働きができないのなら参加できない・しにくい）といった思いをお互いが持ってしまいます。あくまでもお金



選別の作業場は農家さんと学生の笑顔があふれる



スイートコーンの選別

の関係性を越えたボランティアであり、お互いにとって有益な関係性を作るため、お互いが努力する取り組みです。

農家さんは食農教育の教育者としての振る舞いをお願いしています。単なる作業指示ではなく、この作業がどういう意味を持つのか、また農業と食のつながりについてお話をすることが求められるのです。また、学生は「有償」として一定の金銭を得ることができます。ただし、その水準は他のアルバイト先と変わりませんので、あえて屋外で汗を掻く農作業を選ぶほどのメリットはありません。そこで、前述の食農教育がポイントとなります。ボランティア（無償）は、お金のやり取り（金銭的報酬）はありませんが、他者を支援したという満足感等が得られ、これを心理的報酬と呼びます。本事業では有償（金銭的報酬）に加えて心理的報酬をあわせて得ることができます。この心理的報酬こそが、学生がこの事業に参加したくなる動機そのものです。つまり、他のアルバイトとある程度同じ金銭的報酬を得ながら、貴重な農作業体験や食農教育という心理的報酬を得ることができるわけです。

このような関係性を作るため多くの越えるべき壁があり、関係者の工夫で克服してきましたが、ここでは例として作業用具の貸出の仕組みについて紹介します。農作業では、自分で「汚れても良い服、ヤッケ、雨ガッパ、長靴、手袋等」を用意する必要がありますが、続けるか分からないアルバイトのために数千円の初期出費が必要となり、参加を躊躇させます。このため、可能な限り学生が普段従事しているアルバイト先と同じような環境（作業条件や用具の貸与など）に合わせるような工夫をし、参加のハードルを下げています。

【現在の参加状況と今後】

このような工夫と農家・関係者間の関係性構築によって、現在では多くの学生が参加してくれるようになり、学生からの評価も上々です。これは農家側の対応、食農教育がうまく伝わっていることを意味しています。作業は5月～6月の土日に行う1期（主にアスパラ収穫や各種苗の定植等）と、夏休み期間（8月～9月）に行う2期（主にスイートコーンやかぼちゃの収穫、各種管理作業）があり、2024年度は1期38名の学生と12戸の農家、2期は48名の学生と12戸の農家が参加しました。

名寄市立大学援農有償ボランティア事業の実績

年度	1期			2期		
	学生数 (人)	受入 農家戸数 (戸)	のべ 従事人数 (概算)	学生数 (人)	受入 農家戸数 (戸)	のべ 従事人数 (概算)
2017 (試験)	15程度	5程度				
2018	36	11	112	31	8	319
2019	49	16	291	45	11	530
2020	46	14	323	37	10	225
2021	42	14	350	22	16	272
2022	37	13	289	38	11	約200
2023	42	14	348	39	12	約200
2024	39	12	約300	48	12	約250

資料：運営資料から筆者作成

年間では500人日以上学生が活躍していることになり、地域農業にとってある程度の支援をすることができると感じています。事業終了後には、打ち上げを行ったり、「援農有償ボランティア参加認定証」の発行を行ったりするなど学生の継続参加を促す取り組みを行っています。

昨今、就職活動の際に大学で勉強以外にどのような事に力を入れたかが求められるようですが、その時に地域農業に貢献しつつ食農教育を受けられる援農ボランティアは、名寄市ならではの取り組みとして良い話題になるそうです。

近年の厳しい農業を取り巻く情勢の元で、私達の大事な食を支える農家・地域農業を支援しつつ、学生にとってもメリットがある仕組みを作れたことが継続の鍵だと思っています。

学生が名寄市を離れた後も地域の農産物や日本の農産物に思いを馳せ、地域農業を応援してくれる存在になってもらえたら良い、そんな思いを胸に抱えながら受け入れ農家のみなさんが食農教育を続けてくれています。その思いを学生に伝え、末永くこの活動を続けていくことができれば良いと考え、関係者一同、今後も改善と努力を続けていきます。



認定証交付式では参加回数の多い学生に会から賞品が贈られた